
魔女の悪党狩り

八島ちとせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の悪党狩り

【Nコード】

N3697P

【作者名】

八島ちとせ

【あらすじ】

ニールング王国の都市ジェイン市に、マフィア同士の抗争と麻薬密輸が蔓延しており、市民達は常に恐怖と隣り合わせの生活に甘んじている。しかし、それらをたちどころに解決する少女がいた。その名は紫苑。マフィアの連中からは、恐怖と不安と不気味さをこめ「魔女」と呼ばれていた少女である――

魔女の暗躍

一発の銃声が、夜の街に響いた。誰もが恐怖し、屋内に引っ込んで被害から逃れようと身を守る。この銃声も、近頃は珍しくも何ともなくなつた。市民の中には、またかという呆れが恐怖よりも勝っている者がいるかも知れない。大部分は、怯えて暮らす毎日に嫌いのさしている者達だろう。

その中で、ただ一人、銃弾に怯むことなく夜の町中を堂々と歩いて行く少女がいた。艶やかな黒髪をなびかせ、一步一步確実に、目標へ近づいていく。

発砲した者は、この少女を少なくとも脅威だとは思っていない。無知な獲物が、わざわざこちらに出向いてくれたようなもので、手間が省けた。

黒耀の瞳で、少女は発砲者を睨む。睨んでいるといっても、めつたに表情を崩さないことで知られる彼女の顔は、一部の歪みすら見あたらない。

「お嬢ちゃん、ここがどこだか分かつてるのかい？」

馬鹿にしたような声色で、念のために聞いてみる。分からずここへ迷い込んだわけがないと知っていながら。

「麻薬の売買を生業としているマフィア、ジェフリーファミリーの領地。今夜は、ブロンテファミリーとの取引だったわね」

驚いた。この一見無防備な小娘が、この市街のマフィアの取引事情のスケジュールまで把握しているとは、思っても見なかった。

「お前、何もんだ？」

「わたし？ わたしは、あなたたちからこの市の人たちを守る、いわば正義の味方に属する人間よ」

妙に文学めいた自己紹介だった。しかし名は明かさない。明かすほどの人間ではないのか、あるいは、明かしたらこちらが泣いて許しを請うほどの偉人なのか。いずれにしろ、この娘は敵だ。見られ

た以上、生きて朝日を拝ませるわけにはいかない。

「お嬢ちゃん、命は大事にするもんだってパパやママに教わらなかつたかい？」

「教わったわ。でも、それといっしょに、時として命を賭ける度胸も必要だって、習ったの」

「大した度胸だ。だが、その度胸は今日で終わりだ」

銃口を、少女に向ける。向けられた本人は、眉一つ動かすことなく、相手をじっと見据えている。姿勢正しく、ぴしっと立っているだけだ。命が惜しくないのか。

引き金を引く。銃弾が発射される手応えがあった。しかしその弾が少女の心臓を貫くことはなかった。

それは、いつの間にか自分と少女の間に割って入った、長身の男によって阻まれた。

「な、誰だ！」

男の腹部には、確かに銃弾による傷跡がある。黒衣の上からでも、血が確認できる。男は、発砲者の質問には無言を解答とした。

「これ以上の発砲は止めた方が余計な怪我をせずに済むわよ。この子、暴れると怖いから」

「何だと？」

「わたし、不必要に負傷させたくないの。おとなしく武器を捨てて、麻薬をこっちに渡して投降してもらえるかしら？」

「誰がんなことを！」

恐怖を、かき消してもう一度発砲しようとする構え。引き金を完全に引ききるより、黒衣の長身がこちらへ襲いかかってくる方がさらに早かった。

「！？」

長身は、銃をはたき落とし、密売者を彼の背後の壁に縫い付けた。身動きが取れない。少女はこちらへゆっくり近づいてくる。

「ジェフリーファミリー一員、クロード・オーウェル。麻薬密売禁止法違反により、あなたを逮捕します」

今頃になつて思い出した。この黒髪の少女がなんなのか。

「お前、……魔女」

もう遅かった。

ニーベルングの都市ジェイン市の警察組織に、極東の島国からやってきた少女がいる。その少女は、名を天草紫苑あまくさしおんと言った。艶やかな黒髪と、黒耀の瞳が異国的で、周囲の目を引きつけた。

彼女の役目は、ジェイン市内にはびこるマフィアと麻薬の撲滅である。この管轄には、紫苑の他に、彼女の上司であるイーグルスと、同僚の凧なぎ、セリカ、リリスが所属している。他の管轄に比べて女っ気が多いが、いずれも曲者ながらにして実力者で埋め尽くされている。

紫苑は、独自の情報収集先を持っており、おかげで麻薬密売のスケジュールが明らかにできて、今まで尻尾を掴めなかったファミリ―をことごとく暴き出すことに成功している。敵対するマフィア側は、常に見られているという恐怖からか、その力の正体が分からぬ不安からか、武器を向けても表情一つ変えない不気味さからか、彼女をいつしか「魔女」と形容し恐れるようになった。

「紫苑さん、昨夜はお見事でした」

同僚セリカはねぎらいの言葉を掛ける。

「ありがとう。セリカがあそこへ行き着くまでの敵を排除してくれたおかげよ」

「なんの。お役に立てることと言ったら、それくらいですから」

「頼もしい。……あら、教官。聞き込み、お疲れ様です」

管轄の室に、やたらと若くて整った顔立ちの男が、煙草に似せて作られた菓子をくわえて入って来た。

「ふうー……。やっぱり因果なもんだぜ。怪我人が出たって聞いてその辺洗い流してたら、市民に役立たずと罵られちゃった。やれやれ、市民ってのは手厳しいモンだなあ……」

やたらハードボイルドに決めたようだが、くわえているのが煙草ではなくココアシガレットで、来ている服もアイロンをきっちりかけヒゲも剃っている。いわゆる「美形」のせいか、滑稽に思えてならない。おまけに、背中には小さな女の子がくっついて始末。「教官、背中についている女の子は誰ですか？」

「あああ！ もうルーナったら！ おうちでおとなしくお留守番していなさいって言ったでしょ！」

イーグルス教官は、背中にいつの間にかひっついていた女の子を引きはがし叱る。女の子は別段気にすることもなかった。むしろ、ふと自虐的な笑みを浮かべてすらいる。

「男はいつだってそうよね。女の心配を何とも思わずに命を散らすとするんだから」

「……いつも思うんだけど、その昼ドラマみたいな台詞は一体どこから教わるのよ！？」

「テレビ」

「だと思ったわ！ もっと健全な番組を見なさい」

「えー。だってさー、毎週楽しみにしてたビーナツぶらざーずはもう終わっちゃって他に見るのないんだもん。あとはふるホームくらい」

「もう、……まあついて来ちゃったんならしょうがないわねえ。いい子にするのよ？」

「うん」

ルーナは客用のソファにちゃんと座って本をリュックから取り出す。ちらつと見ると、『惜しみなくあの人を奪う』というタイトルが確認できた。

「そんなもの読むんじゃない啦！」

「えー」

ルーナの本は、イーグルスの手によって健全な絵本に取り替えられた。

「ったく。はーい、みんな。ちょっと集まって」

イーグルスは手をぱんぱんと叩いて注目を集めた。部下は速やかに彼の周囲に集まってきた。

「俺様達の次のお仕事は、ランチエスターファミリーを壊滅させることよ」

「ランチエスターというと……最近やけに暴れ回っているという？」

「そうそう。さすがね紫苑ちゃん。説明が楽だわ。やつこさん方、今までは細々麻薬密輸で食っていったような弱小だったのよ。まあ、麻薬が絡んでるだけでも重罪だけどね。それでねえ、今まではそれだけだったんだけど、最近じゃ無差別に市民を傷つけて怯えさせてるらしくてねえ。弱小ファミリーだと思って甘く見ていた俺様達の怠慢も原因だけど。そいつらにちよいと正義の鉄槌って奴をぶち込んでやらなくちゃね」

「しかし、なぜいきなりそんな暴挙に及ぶのでしょうか？ 今までの調査資料によると、ファミリーは少数ですし、幹部だって国家中枢に顔が利く連中とは思えません。弱いですし」

セリカはイーグルスに問う。何だかんだ疑問をぶつけるが、その本音は最後の一言で語られた。

「うん。それなんだけどね。何か、人を雇ったらしいのよ」

「マフィアって、外部の人間の力を必要とするような組織ですつけ」
「さあねえ」

「しかも、よくそんな傭兵雇えましたよね。しかも二人も。うまく言いくるめたんでしょかねー。弱いですし」

「セリカさん、さつきから本音がぼろぼろ出てるわよ。で、二人ほど雇ったらしいんだけどねえ。それがもう強くって。千歳のことわざにあるじゃない、トラノイヲカルキツネって。狐が、虎の胃袋を掴んで言うこと聞かすって言うアレ」

「いえ、その意味は少し違ってます」

「あらそう？ イって胃袋のことじゃないの？」

「威力の威です」

「そうなの！？ どうしよう！ 俺様ルーナに、『トラノイヲカル

キツネっていうのはね、狐さんが虎さんの胃袋を手をしている、つまり虎さんの食べるものを持って意のままに操ってるって言う意味よ」って教えちゃった!!」

それをのんびりと聞いていたルーナは、案外驚いてもいなかった。「大丈夫大丈夫。どうせセーちゃんが間違えて覚えてるんだろって思ってたから」

「ヤダ俺様一人で超恥ずかしい!!」

「セーブ教官。すこぶるどうでもいいので本題に戻って下さい」セリカがおさめる。

「ああ、ごめんね。で、そいつらを今度こそちゃんとしょっ引こうって話よ」

「分かりました」

「今日はみんな、ひとまず帰っていいわよ。ジェフリーの連中の件でここ数日は泊まり込みだったから、おうちの人たちのところに帰ってゆっくり休みなさい」

部下は皆従った。セリカとリリスは同居人である友人ヘラの家、紫苑と凧は居候させてもらっているロックウェル診療所へ。

ロックウェル診療所は、大忙しだった。おそらくイーグルスの言っていたファミリーが好き勝手に暴れているのが原因であろう。銃弾による怪我人が多い。中には、深く斬られた者もいた。診療所を預かる兄弟、ユウヤとソールは、部下のナノと三人で数十人の怪我人に対応していた。

「大変そうね」

「そのようだな」

「手伝ってあげればいいんだろうけど、素人じゃあね……」

「部屋に戻ってようか」

「そうする。ここにいっても邪魔なだけだものね」

ロックウェル兄弟たちの暇ができるまで、紫苑は凧といっしょに自室へこもっていることにした。ユウヤたちにとっての忙しさは案

外すぐに収まった。彼らの手際の良さが幸いしたのだろう。

「お疲れ、ユウヤ君、ソール君。ナノ君も」

「ああ、帰ってたのか。お帰り」

「ふい〜。最近忙しくなったよなあ〜。今まではすっげ暇だったのに」

「そうね」

一段落したロックウェル達は、紫苑や部下をリビングに招いて紅茶をさし出した。ナノが紅茶を口にしようとした時、ベルが鳴る。

「誰だ？」

ナノは敬愛するユウヤ手ずから入れてくれた紅茶を楽しむことに邪魔をされ、不愉快になりながらも玄関へ行って訪問者を確認する。

「……なんだおまえらか」

「あ？　なんだとは何だよ。冷てえな。同じ学校の仲間が遊びに来ちゃ悪いのかよ」

「おまえの鳴らした呼び鈴のせいで、僕の楽しみが遠のいた」

不機嫌極まりない表情を見せつけてやりはするが、ナノは友人達を通す。

訪問者は、紫苑やユウヤの通っていた学校の仲間であつた、藤枝^{ふじえだ}昂^{すばる}とエミリオ・グリニツジだった。ナノは彼らの一学年下で、先輩後輩の関係であるはずだが、ナノにとってユウヤ以外の人間は全て自分よりも下だという認識のため、ここまで偉そうに振る舞う。

「昂、リオン。久しぶりね」

「うん。近くまで寄つたから、ちよつと顔を見せにね」

「紫苑の好物持ってきたぞー」

「パウンドケーキ……！？」

紫苑は非常に珍しく表情を崩す。その目には期待がふんだんに込められている。

「ちようどよかったな。これからお茶でも飲んで少しのんびりしようとしてたんだ」

「そっか。じゃ、俺たちも」

「失礼します」

昴の持ってきたケーキは、飲食店「バトーキン」の支配人スーホの手造りで、その味は誰にも叶わぬほどの美味と評価されている。それを食べつつ、ユウヤの紅茶を飲むとは、紫苑にとってはこれほどの贅沢はなかった。

「紫苑たちもユウヤたちも大変だな」

「最近、忙しいんだってね」

「ええ。ちよっと、調子に乗ってる犯罪者がいるのよ」

「まあ、これが仕事だからな」

話題はあまり明るくない。

「二人とも、町中を歩く時は気をつけてね」

「平気だって。これでも充分警戒してっから」

「ならいいけど」

「でも物騒になっちまったよな。前まではマフィアの抗争とか麻薬密輸とかもあったけど、今ほど露骨なもんでもなかったのに」

「そうね。今までの平穏を、奪還するのが、わたしと凧の仕事よ」

「熱心だねえ。紫苑ってさ、独自の情報ルート持ってるんだよね？それがもとで壊滅してきたファミリーも数え切れないんじゃない？」

「……………どうかしらね。数えてないわ。記録を確認すれば分かるかもね」

「しっかし、何なんだろうなあ。いきなり暴れるなんて。怖くてたまんねえ」

昴はかかかと笑ってケーキをつつく。

「怖がつてるようには見えんな」

凧は冷静に見抜く。

「……………あ。昴、もう行かなきゃ」

「あ？ もうそんな時間か」

ふと、紅茶が冷める頃にエミリオが言う。昴も懐中時計で確認した。

「あら、用事？」

「まあな。野暮用で」

「そうか。気をつけて帰れよ」

「うん。じゃ、お邪魔しました」

友人二人は、さっさと診療所を去ってしまった。ちなみに、昂の手土産のパウンドケーキは、ほとんど紫苑によって平らげられた。

魔女の暗躍（後書き）

初めての連載ものです。なんでいきなりマフィアものかといいますが、その時ちょうどマフィアの抗争や麻薬密輸のお話を池なんとかさんの番組で紹介されていたのを観て、インスパイアしたためです。影響されやすいなあ、自分。完結まで、どうぞごゆっくりご覧になって下さいませ。

魔女狩りの開始（前書き）

最近、弱小といわれているランチエスターファミリーが、好き放題に暴れているとの情報を得た。紫苑たち取締課のメンバーは彼らを逮捕するために、それぞれ万全の準備を行う。そのファミリーの戦力となっていたのは、奇しくも紫苑のかつての学友、藤枝昂とエミリオ・グリニッジだった――

魔女狩りの開始

深夜、半月でも充分道が分かるほどの輝きである。夜道は気をつけろと言う警告を無視して、その傭兵二人は待ち合わせ場所の酒場へと真っ直ぐ進む。到着した酒場には、ランチエスターの幹部が数人待ち受けていた。

傭兵二人とは、藤枝とグリニッジである。紫苑の学友であるはずの二人に、彼女の仲間の面影はみじんもない。『仕事』の顔だった。依頼は？」

グリニッジは即座に問うた。

「魔女を始末して欲しい」

「魔女お？　こんなご時世にまだそんなレトロなもんが生き残ってるのかよ？」

「ただの比喻でしょ。どんなに秘密にしたり隠したりしていても、絶対に暴かれてしまうから、恐ろしくてつけたあだ名だよ。それに、このご時世に刀を持つてる君の方がよっぽどレトロだよ」

グリニッジは嘲笑を含めて藤枝に説明してやった。

「なるほどねえ。で、報酬は？」

「その小切手に好きなだけ書き込めばいい」

「弱小だったファミリーが言う台詞とは思えないね。ま、いいや」

「じゃ、さっそく行ってくると思いますか」

傭兵達は、報酬を確認しすぐに酒場を去った。

魔女は学友の紫苑である。しかしだからといって情が移ると言う愚行を、二人はしない。全ては仕事だと割り切っている。

グリニッジは、恩人のユウヤには秘密にしながらこの稼業を続けている。藤枝も、母の生活費を稼ぐために、内緒でこの世界に首を突っ込んだ。あのお節介な母のこと、息子がこんな仕事に首を突っ込んでいると知ったら絶対に止めるだろう。しかしまとまった金を稼ぐには、この方法が手っ取り早い。まともな職に就けず、学校へ

通うことができたことさえ奇跡だった彼にとっては、邪の道も神の通り道に錯覚できた。

彼らは、偽の電話で紫苑をおびき寄せることにした。電話で、助けて、という救いを求める声と、グリニッジの作った銃声で現実味を増させた。仲間思いの紫苑なら、必ず来る。かろうじて今の場所を告げるフリをして、電話を切った。わざわざ、軽くではあるが怪我まで作る。

「昂！ リオン！ どこ？」

ほら、来た。

「紫苑！ 来てくれ」

「そっちね。今行く」

紫苑は声と半月の明かりを頼りに、二人のもとへ駆けつける。すでに二人は、誰かに負傷させられている一般市民の化けの皮をかぶっていた。

「紫苑……」

「大丈夫？」

「うん。かすっただけ」

「そう。救急車を呼ばなくちゃね」

「いや、それほどの怪我じゃない」

「分かった。手当てしなくちゃね。それと悪いけど、どんなことがあったのか、分かる範囲で構わないから話してくれる？」

「ん。……二人で、この道を歩いてたら、いきなり銃声がして、腕を怪我して」

「犯人の顔は見なかった？」

「悪い。暗くてよく分かんなかった。……なあ、悪いけど、手え貸してくんねえ？」

こちらを必死そうに見上げているかつての学友二人をじっと見下ろす紫苑は、しかしそれを断った。

「できないわ」

「はあ？ なんで」

「それが嘘だつて分かってるから」

紫苑は回りくどい警告をした。

「その怪我、きつとわざと作ったんでしょ？ 不意打ちも嘘ね」

「紫苑……、何言ってるの？」

「回りくどくてわかりにくいなら、はっきり言っただけでしょう？ あなたたち、わたしをここへおびき出すために一芝居うったのよね」

紫苑は学友二人にはめられた最中でも、表情を崩すことはなかった。

「何言ってるんだよ。俺たち襲われたんだぜ？ 随分ひでえ言いがかりじゃねえか」

「かすり傷でも銃で撃たれたのなら普通医者へ行くものよ。それに、撃たれたって言うには、弾丸が見あたらない。火薬の匂いもしない。暗くてよく分からないなんて、嘘が下手ね。こんなに明るいいじゃない。リオンは夜目が利くし」

紫苑は二人が立ち上がるのを見て、二人からゆっくり距離をとる。彼らの化けの皮は、魔女によって見事にはがれた。

「いつから分かったの？」

「紅茶を飲んだ時から。リオン、わたしが独自に情報ルートを持つてるって言ったわね。誰からそれを聞いたのかしら」

「そりゃ風の噂で」

「……あなた、嘘も言い訳も下手ね。わたしが、特別なルートを使って情報を得ているってのは極秘なの。このことを知っているのはわたしの属する管轄の人だけよ。しかも、彼らはこれを誰にも言わない義務を課せられているの。つまり、どういふことかは分かるわよね？」

「後ろ暗い人間だけが、お前の秘密とやらを知ることができるってか」

「そついうこと。わたしを騙しておびき寄せたつもりだったんでしょうけど、甘いわね。わたしに下手な嘘や演技は通用しないわよ」

紫苑は容赦ない。常に無表情で、何を考えているのかわからない。だけど、人の嘘や本心を見抜く術を持っているのだから、味方になれば頼もしいが敵に回すとおっかない。学生のころから、それは嫌というほど思い知らされてきたというのに、それを自分たちは忘れてしまったのだろうか。

藤枝は、ふつと鼻でひとつ笑い、すつと立ち上がる。

「やっぱ、魔女にはすべてお見通しってわけか」

「どうかしらね」

「で？ 正義の味方は、悪に堕ちた友達を断罪するってことか」

「そういうことになるんじゃない」

紫苑は、武器を手に持ちいつでもこちらに攻撃できる状態である二人から、少し距離をとる。この二人の戦闘能力の高さは知っている。とくに、グリニッジには紫苑にとって相性の悪い相手だった。

「わたしは、麻薬取締の者。あなたたちは、麻薬密輸をしている弱小ファミリーに雇われた傭兵。まごうことなき、敵同士ね」

「それで、紫苑はどんな策を練ったのかな？」

グリニッジの手には愛用の拳銃が握られている。銃口こそ紫苑に向いていないが、仕事人の顔に変貌した彼は、紫苑を威嚇させるに充足している。

「ないわ」

紫苑はあっさりと無策をさらす。

「はーん？ さすがの魔女も、俺達にはお手上げてか？」

「いいえ。最後の最後まで、信じていたから」

紫苑は休まず距離を置く。藤枝は、紫苑の返答に少し驚いた。紫苑ほどに頭の切れる人間なら、さっきの電話にだって不審さを抱くのは当然である。正直、電話でおびき寄せる方法で紫苑を罠に引っかけることができるとは考えていなかった。どこか別のファミリーと紫苑を接触させてどんちゃん騒ぎしているところに紛れて狙撃してしまう方が楽だったとさえ考えている。

「残念だね、紫苑。敵に情けをかけたらだめだって、僕があればど

忠告したのに」

「覚えてる。でもね、友達っていうのはそういうものよ」

「じゃ、その友達に殺される運命を呪いな。じゃあばよ」

藤枝は、紫苑がせっかくとった距離を一気に縮めた。左手に鞘、右手には柄が握られ、射程範囲内に入ったと直感し、すばやく刀を引き抜いた。

刀から、一陣の風がぶわっと生み出された。藤枝の持つ刀は、妖刀として恐れられた代物である。その刀身には常に風が共にあり、その風が武器になる。刀自体が相手に届かずとも、風がぶうんと突撃してくれる。

紫苑は風によって視界が悪くなったのを見逃さない。一目散に逃げ、彼らから離れようと全速力で走る。運動向きではない彼女にとって、長時間のダッシュは苦痛でしかない。しかし、それでもしなければ死ぬ。携帯電話を右手に握りしめ、画面には目もくれず、それでもかけたい相手の電話性格に通じさせた。

『お嬢か』

「風？　今どこかしら」

走っているせいで、まともにしゃべれない。

『市内の見回りに出ている。今、ちようと役場の前を通った』

「役場前？　外にいるのね？」

『そうだが、どうしたんだ？』

「今ね、昴とリオンに追われているの。できれば助けに来てほしいの」

『わかった。いつでも、俺を呼ぶといい。必ず駆けつける』

「頼もしいわ。それから、セリカとリリスにも連絡お願いね。今はまだ大丈夫だから」

『心得た』

紫苑は電話を切った。

自分の体力が二人にとつてい及ばないことは痛いほど承知している。なるべく体力を温存しつつ、相手をひっかきまわす。この市に

配属されてから、紫苑はまず土地感覚と地理を頭に叩き込んだ。市民ほどではないが、現在相手にしている二人よりはここに詳しい自信がある。

人の通り道をなるべく避ける。そして、足場の悪い砂利道や、建物と建物のわずかな間を選ぶ。時には、らしくもなくブロック塀を飛び越えた。当然、かなりの時間と体力を浪費した。威嚇の銃声で相手の位置を大まかに確認しながら、次の悪路を目指す。

「……コード入力。タイトル『脚力上昇』。レベル二。有効時間六〇秒。……コード出力開始」

何やら怪しげなぶつぶつ独り言。凧との会話を終えてもまだ握りしめていた携帯電話の先を、笑っている自分の足に向ける。赤外線レーザー先から光が一迅真つ直ぐに紫苑の足に当たる。光が消えると、紫苑の足は笑うどころか、まだ走りたりないとも言いたげな元気を取り戻していた。

この、紫苑にとってありがたい魔法のような術は、一分しかもたない。一分を過ぎると効果は切れ、普段よりも愚鈍になる。

紫苑は高く跳躍する。トレードマークの黒髪が、空に舞う。民家の屋根に着地する。そこから、銃声と刀の生み出す風を探す。見つからない。案外、近くに潜んでいるかも知れない。隣の屋根に飛び移る。背後から刀を抜く音が微かに聞こえた。普段の自分ではありえない脚力で、紫苑は高く高く飛び上がった。

自分が直前までいた場所に、刃となった風が俊速で通り抜けた。あれをまともに受けたら全身斬り刻まれていた。屋根に着地し、背後をさつと振り向いた。もう藤枝が追い付いてきている。ここで貴重な一分間を無駄にはできない。紫苑は藤枝から距離を置くべくもう一度跳躍した。着地の先の街頭は、もう寿命なのか時々灯りがぶつ切れる。

もうすぐ一分が過ぎる。ただでさえ運動に弱い自分が、これ以上鈍くなれば致命的だ。次の着地点を決めなければ。とっさの判断なら、優れている。

「そーれ」

真下から、藤枝の気の抜けた声がした。ふっと下を見下ろすと、紫苑はらしくもなく顔を紫色に染めた。

「やめて！」

紫苑の叫びは届かず。藤枝の持つ刀が鞘から瞬時に抜かれ、外灯の根を両断した。

足場がぐらつく。心なしか、体が、特に両足が重い。空にふわりと浮いたような感覚。夢でよく見た、背中の感触が急になくなって、ふっと落ちる感じに似ていた。下には、刀を構えて待ちわびている敵がいるというのに。

紫苑はぎゅっと目をつぶって、思わず再び叫んだ。

「風！」

おそらく、この無防備な状態をグリニッジが遠くから狙っている。彼の狙撃の腕はもう嫌と言うほど知っているし、グリニッジならことうするだろうという予想がついた。二人の敵から自分を守るには、自分を守ってくれる番犬ともいえる彼の助けを呼ぶしかない。

遠くで、銃声が響いた気がした。刀を鞘から素早く抜く音が、耳のすぐ近くでした。だが、その攻撃を受けた感覚は、しなかった。地面に体を叩きつけられる衝撃もなかった。

「お前っ」

藤枝は少しだけ驚愕する。紫苑を抱きかかえて庇いながら、右腕一本で自分の刀を少女から守り、その胴体を張ってグリニッジの弾丸を防いだその男。黒衣に身を隠して、胸元から（こちらからは見えないが、グリニッジの弾丸の軌道上、背中も）どす黒くなった血を流しているその男。右腕は刀に斬られ、胴を撃たれても、痛がる様子を見せることのないその男。

天草風が、飼い主の呼びかけに応えた。

魔女狩りの開始（後書き）

連載二話めです。ところで、バトルはいいですねえ。ハリウッドでもアニメでも漫画でも、バトルがあるとわくわくします。

このお話は、もう少し続きます。最後までお付き合いくださいませ。

仲間は遅れてやってくる

「呼んだか」

「ええ。助かったわ」

二人とも、淡々と言葉を交わす。

「凧か」

「おう。久しぶりだな」

「へっ。さつき会ったばかり」

「わからないか。その目をしたお前とは、もう何年ぶりだかわからない」

「飼い犬は主人に似るってか。言葉が回りくどくなってんぞ」

「ならばなるべく簡潔に言おう。今のお前は、辻斬りと変わらん。ただの悪党だ」

凧は紫苑を抱えたまま一步下がる。地面に、そつと座らせた。

「大丈夫か」

そう飼い主に聞く。

「おかげで無傷よ。ただね、今はいつもよりちょっと鈍くなってる」
「副作用か。あとどれくらいで終わる？」

「二分よ。でも、応戦は可能」

「充分だ」

紫苑はポーチから文庫本ほどの大きさしかないノートパソコンを取りだし、素早くキーボードを叩く。最後のキーを押した直後、凧の目前に、彼の背丈よりも長い杖のようなものが現れた。凧は迷わずそれを握りしめる。二三ぶんぶんと振り、調子確かめる。銀色に鈍く光る、槍だった。

「お嬢、そこから動かないように」

「うん」

凧の見据える先には、辻斬りがいる。かつては学友だった、仲間だった辻斬りが。

「さて、邪魔するのか、魔女の番犬？」

「番犬とはなんだ？」

藤枝はため息をつくも律儀に教えてくれた。

「てめえのことだよ、天草凧。いついかなる時も魔女を陰から守る。しかも自分の身を顧みない。弾丸ブチ込まれても、刃物でぶった斬られても、爆弾でブツ飛ばされても、すぐに治っちまう。魔女の呪いを受けた、魔女を守る犬。そうさ、てめえはまさしく犬だよ」

「犬で結構」

藤枝は低く飛んで、凧との距離を一気に縮める。紫苑にやった時と同じ、風を巻き起こすか、その刀身で両断するか。凧はその刀を受け止める。刀身から風が現れ、守るように藤枝を包み、敵と認識した凧を切り裂こうと牙をむく。凧は怯まない。

「……犬が」

「辻斬りに言われても」

「言ってくれるねえ！」

藤枝は凧からいったん刀を離し、犬の後ろで無防備に座り込んでいる魔女に狙いを定めた。目的は魔女一人だけ。紫苑は狙われているというのに顔色一つ変えない。

「お命頂戴！」

刀を、魔女に振り下ろす。生意気にも、目を閉じることもしない。辻斬りは、魔女を切り刻むことかなわず、番犬によって再び阻まれた。舌打ちをした。どうやら、魔女を始末するためには番犬から片づけなければならないようだ。魔女は、番犬に絶大の信頼を寄せているようだった。

紫苑は前方の敵を凧に任せ、副作用が切れるまでは凧のサポートに回った。凧の銃弾による傷はすでに癒えている。銃声のした方をさぐり、パソコンのキーを何度か打つ。画面には市の細かな地図が映っていた。その地図の隅に、一点だけ、赤く点滅しているものがある。狙撃手は、その赤い点滅点にいる。紫苑は再びキーボードをたたく。エンターまで打ち終わると、遠方から爆音が聞こえた。

副作用は、治った。紫苑は立ち上がる。

「風、あと少しだけがんばれる？」

「それが、お嬢の命ならば」

「いい子」

紫苑はいったん、パソコンを閉じる。ポーチから携帯電話を出し、先を昂の足元に向けて決定ボタンを押す。

昂の足元が、妖しく光を発する。そこにはわけのわからない数式や文字が円状に彩られ、それだけでは飽き足らず、触手を伸ばして昂の手足を拘束した。

「ぐ……」

「悪いけど、ちょっとおとなしくしてくれるかしら」

手足の自由を奪われ、拳句に疾風すら魔方陣に奪われては、抵抗できようはずがない。

「さて、ずいぶんてこずらせてもらったけど、これで終わりね」

「はん。そりゃこつちのセリフだ」

ランチエスターに雇われた傭兵は、無駄口を叩く程度にはまだ元気があった。紫苑は、ポーチから手錠を取り出す。かしゅん、と金属の擦れる音が響く。手錠をかけるため、一度拘束を解いた。

「捕まえるってか。ダチだった人間を」

「今は敵同士じゃない。情に訴えるなんてずいぶんらしくないやり方に出るのね」

「情？ はっ、確認しただけだよ」

「そう。じゃ、大人しく捕まってね」

昂の手をとり、その手首に手錠をかけようとした。

その時、風が紫苑を抱きかかえて昂から離れようとした。

「な、風？」

自分が今までいたところから、軽快な音がした。

どっ、と地面にたたきつけられた。上には、自分をぎゅっと抱きしめて離さない風がいる。様子がおかしかった。今までにこういった状態になったことはいくらでもあるが、その時はいつも、すぐに

起き上がった、「立てるか」と手を貸してくれたくらいだ。

「風？」

呼んでも揺すつてもどいてくれそうにないので、唸りながら苦勞して風の下から這い出てきた。

風は起きない。背中を中心に、腕にも脚にも、無数の銃創が残っていた。試しにもう一度揺すつてみたが、風はどうか呼吸するだけで、起き上がりもしなければ返事もしない。いつもなら、すぐに傷が癒えて、なんの問題もなくけろつとしているはずなのに。

「リオン……？」

「あつたりー」

紫苑の見上げる先には、リオンと昴が武器を構えて立っていた。さっきの銃声は、さっきまで身を潜めていたリオンの仕業だとすぐに見破った。現状の敵で銃器を扱うのはリオンしかない。

昴をわざと拘束させて紫苑をおびき寄せ、射程範囲内に足を踏み入れたらマシンガンで八チの巣にする作戦だった。それにいち早く気づいたのが風だったのだ。

「本当は紫苑も巻き込めればよかったんだけどね。邪魔がいなくなったから始末が楽だよ。本当にてこずらせてくれちゃって」

リオンの左手には、先ほど使ったのであろうマシンガンが握られている。右手には、長年愛用していたという拳銃が握られ、半月の光に照らされ鈍く輝いた。

「さて、番犬のいない君は、無防備な小娘でしかない。じゃ、バイバイ、魔女」

リオンは心底楽しそうな笑顔を向け、ついでに銃口も紫苑に向けた。

引き金が引かれる。ここで自分は死ぬのか。

ふと、後方から妙な声がした。

「必殺！　せーちゃん防御ミサイル！！」

「ごへらっ……」

紫苑の横すれすれを、人間のようなものが突っ切り、リオンと昴

に直撃した。

素早く後ろを振り返ると、そこには頼もしい同僚が立っていた。その隣には、防御ミサイルなるものを発射した、小さな女の子が胸を張って立っている。

「セリカ！」

「お待たせしました紫苑さん！」

セリカは紫苑の手をとり立たせる。足元に倒れている凧を確認して、驚いた。

「うおお、凧さん！ 大丈夫ですか？」

「多分、リオンの特殊な弾丸のせいで傷が癒えないんだと思う。貫通していれば、すぐに傷は治るはずよ」

「え、じゃあまだ凧さんの体の中に弾が残ってるんですか!？」

「そうみたい。しばらくすれば弾が自然に体から出てくるわ。時間はかかるけど」

「凧さんて不死身ですねえ」

「ちよつとちよつと!! あなたたち俺様を忘れてない!？」

今しがたルーナによってミサイルと化したセーブ・イーグルスが、頭をさすりながら起き上り、こちらに向かって叫ぶ。リオンに直撃し、撃たれたというのに、けろつとしていた。イーグルスは結構石頭だったようで、脳天に防御ミサイルをくらったリオンは体勢を立て直すのにかなりの時間を要した。

「あ、そーだったそーだった。説明しよう！ セーちゃん防御ミサイルとは、味方を守りつつ敵をどつく便利なミサイルなのだ」

「待ちなさい!! だいたいなんでルーナがここにいるのよ! おうちでおとなしくしてなさいって言ったでしょ!」

イーグルスに叱られているにもかかわらず、ルーナは委縮もせず、むしろふんぞり返っていた。

「えー、いいじゃん。おかげで紫苑ちゃん助かったんだから」

「危ないから出てきちゃいけませんって言ったでしょ？」

「そんなことよりさ、凧ちゃんまずくない？」

「俺様の話を聞きなさい！」

ルーナに振り回されてはいるが、イーグルスは風の状態を確認した。瞬時に、真面目な表情に変わる。

「まずいわねえ。風ちゃんは一とまず撤退だわ」

「教官、ルーナちゃんと急いで病院に運んでください」

「了解よ。あちらさんの相手は二人がしてやってちょうだい」

イーグルスは風を抱えて、ルーナに携帯電話を渡す。それで、救急車をよんでちょうだいとお願いした。

紫苑の副作用はすでに治っている。昴の拘束も解けてしまった。

「紫苑さん、サポート頼みます。二人相手はちよつとてこずりますから」

「分かってる。できればリオンを優先して。あの子に、わたしの力は効かない」

「がってんしょうちです！」

言うところ、セリカはリオンの銃撃も昴の剣技も恐れず、敵二人にまっすぐ突っ込んでいく。防弾チョッキを装備してはいるものの、やはり撃たれるとなると恐怖するのが常である。しかし、セリカにとっては、恐怖のうちに入らなかった。

セリカの両手には、武器と呼べるものはない。あるとすれば、籠手だけだ。セリカの武器は、己の拳だけである。

「ていつ！」

リオンの胴に、容赦なく拳を叩きこむ。相手が、ぐっ、とむせた。しかし一発だけでは仕留められず、後方に下がらせてしまった。

「そのままリオンを攻撃して。絶対に攻撃の時間を与えちゃ駄目よ」「了解」

セリカは紫苑の指示に従う。頭を使うことがあまり得意でない彼女は、戦闘の際は本能に従う。だから、目の前にいる敵が、自分に近い敵を標的とする。が、紫苑の指示があるとなればそれは別だ。策略家に近い紫苑の指示には、従うべきだ、と彼女は素直に考えている。

「何なの、この馬鹿力……！」

リオンは腹を押さえながら銃を構える。このセリカという相手は、銃器による脅しや攻撃に臆することのない者らしい。ためらわず引き金を引こうとしたが、さっきまで目前に迫っていた少女はいない。「どこに……！？」

リオンは焦って周囲を見回す。前方にも後方にもいない。

ふと、影が差す。半月はいまだ雲に隠れることなく市街を照らしているというのに。

上をばつと見上げた。月を背に、地へ降り立とうと落下してきたセリカが、拳を構えてこちらを見下ろしている。

（まずい……！）

とっさに両腕を上げて拳から頭を防ごうとする。

「どりゃあああ……！」

セリカの一発は、重かった。頭を守ることに成功したが、両腕は折れたかもしれない。腕を襲う衝撃にひるみ、リオンは拳銃を落とした。

セリカの攻撃はそこで終わらない。がら空きになった彼の襟首を鷲掴み、彼を背負い込むようにしてそのまま投げた。襟はつかんだまま。

リオンは、思い切り地面に背を叩きつけられる。喉の奥から、何かがせりあがってくる感覚に耐え切れず、一度せき込んだ。両腕は自由だが、さっきからなかなか言うことを聞いてくれず、動かせない。折れてるな、とのんきに考えた。

「はい、ひとまず一人確保つと！」

セリカはすかさず手錠をかける。彼を見張りながら無線で上司に連絡した。今は手が離せない状態で、代わりにリリスを向かわせるとのことだった。手が空いたら、向かってきてくれるらしい。

「死神の鎌に首をちょん切られなくなったら、おとなしくしててくださいね！」

「死神？ そんなものまでいるの？」

「いますよお。ウチはかーわいい死神も所属してますからね！」

にっと笑い、セリカは急いでもう一人の敵の対処に向かう。紫苑の攻撃手段が一切通じないという点ではリオンの方が格段に厄介だったが、昴もある意味では厄介だった。

昴の持つ刀からは、風を巻き起こすことができる。刀本体で攻撃せずとも、風が敵をなぎ倒してくれる。わざわざ敵地に突っ込む危険を冒すことなく、安全な距離を置いて攻撃できる。拳が武器のセリカにとっては、むしろ昴の方が厄介だった。

「紫苑さん、無事ですかあ！」

「無事よ」

紫苑は、逆に昴に距離をとらせて身を守っていた。紫苑は運動向きではないから、懐に入られると頭は瞬時に判断できても体がそれに追いつかない。しかし、昴の攻撃が刀から発せる風だけなら、紫苑のパソコンと携帯電話から発動した防護壁で何とかできる。あとは、近づかれないように、こちらから威嚇として雷の矢を何本か放ったくらいだ。

「お疲れ様です。あとは私が引き受けます」

「大丈夫よ。セリカは昴の刀の攻撃を止めて」

「といつても、風の攻撃が邪魔なんですよう……」

「防ぐわ」

「そりゃ頼もしい」

昴の肩は上下していた。風を出すのは、刀を振るうよりも力を使うのだろうか。一度唾を飲み込んで、再び構える。

「……疾風、まだ行けるか？ あと少しだ。ちよいと力を借りるぜ」
刀に話しかける。

「魔女、いくぞ」

「いつでも。あなたは捕まる運命にあるけどね、辻斬りさん」

「戯言を――！」

昴は渾身の一撃のつもりで、刀を鞘から抜き、風を放つ。最後の一発のつもりらしい、今までの風よりも速く、鋭く、一直線に向か

ってくる。風が、魔女を狩ろうと迫ってくる――

仲間は遅れてやってくる(後書き)

連載三話めです。まだまだ続きます。

解決

昴の一撃は、重かった。紫苑は防護壁を最大限に出した。少しでも気を抜けば壁は簡単に破られ、あつという間に風に食われるだろう。風は、主人の敵を切り裂くために、妨げとなっている壁にくいつく。

一秒でも早くこの押し合いが終わればいいのに、と紫苑は頭の隅っこで思った。最後の一撃というにふさわしい攻撃だった。窮地に追い込まれたネズミは、ネコをも噛む。この一撃で終わらなければ自分の安全は保障されない。だから、昴はここまで必死になれるのだ。しかし、だからといって紫苑も妥協してやるつもりはない。市民の安全を守るために、引き下がるわけにはいかない。

「紫苑さん、がんばです！」

横から、セリカの声援が聞こえた。できれば防護壁を昴の一撃よりも長く保つために集中していたいが、この際気にしないことにする。

「くう……。コードナンバーG-002レベル上昇9から99へ。

データ入力完了、出力。最大」

紫苑は早口で防護壁の強化を促す。最大出力をしてしまった以上、効果が切れれば副作用が紫苑を襲い、普段よりも何倍もの鈍くなる。そのあとは、セリカに託そう。

「……ちっ」

昴の風が、かき消えた。一瞬の好機を、セリカは逃さない。風と防護壁が同時に消えたのを見計らって、一瞬で昴との距離をゼロにする。懐に潜り込まれた昴は、頭で認識できても体がついてこなかった。

セリカは昴の右手に握られていた刀をはたき落とした。刀は、昴の手を逃れて地面に叩きつけられ、からんからんと軽快な音を奏でる。

そのまま、はたき落とした手で昴の右手首をがっちり掴み、昴を背負い込んでそのまま投げる。辻斬りの右腕を掴んだまま。

昴の世界が、一回転した。回転が終わって見えた景色は、半月の明るい夜空と、小さな、漆黒の少女。

その少女は、華奢な足を重たそうに動かしながら、ふらふらしながらそれでもこちらに迫ってくる。肩が上下している。二度ほど、ばったりと倒れそうにもなった。

ふじえだすばる
「藤枝昴。殺人未遂に公務執行妨害その他いろいろと罪状はあるけれど、以下省略で逮捕します」

辻斬りはセリカに投げ飛ばされてから大した抵抗もせず、大人しくお縄についた。しゃがみ込んだ紫苑が、昴の手首に手錠をかける。すぐに、紫苑は立ち上がる。

「セリカ、悪いけど昴とリオンを頼むわね」

「え？ 構いませんが、どこかへお出かけですか？」

「ええ。ちよつとね。どうしても行かなくちゃ行けない場所があるの」

紫苑はそれ以上会話する気がないらしく、セリカに有無を言わずさっさと行ってしまった。

半月の夜、彼の行きつけの酒場。

雇った傭兵二人は、金を受け取ったら、依頼を必ず成功することでは有名だった。契約をした時、二人は確かに彼のなけなしの全財産を受け取った。つまり、彼の願いを叶えてくれるということに他ならない。

彼の願いは、魔女を始末すること。傭兵二人は、それを約束した。今まで弱小ファミリーに甘んじ、大した利益も得られない屈辱的な日々を送っていたが、それもこれで最後だと彼は思っていた。彼らに破格（彼にとって、であって、客観的に見れば取るに足らぬ額ではあるが）の報酬を与えたため、今は懷が寂しいが、それもすぐ

に終わるだろう。魔女を葬った者として、その世界では有名となり、多くのファミリーを従わせることができるだろう。そう考えると、笑いが止まらなかった。

ここまで露骨に有頂天になった彼を、恐怖のどん底に落としたのは、葬られるはずだった者だ。

酒場のドアが開く。酔っていた彼は、一瞬だけ危険の認識が遅れた。その一瞬は命取りだった。その訪問者が何者であるか、頭が確認した頃には、酒場の客は全員逃げていた。店主も、裏口から逃げたらしい。この場には、その訪問者と彼しかいなかった。

訪問者は、ゆっくりとではあるが、まっすぐ確実に、彼に近づいてきた。彼は、手で弄んでいたグラスを、床に落としてしまった。理解できなかった。自分の願いが叶わなかったのだと。なぜだなぜだと頭の中に疑問が駆け巡るが、本能が逃げろと命じ、体を動かそうとした時には、もう遅かった。

「あなたを、逮捕します」

魔女は、人生でこれほどまでに怒りを全身で表したことはなかった。その表情はまさに般若のよう、小さな白い両手は、ぶるぶると震えながらぎゅっと握りしめられている。一步一步近づく足音は、獲物を威嚇するかのように響き、恐怖に支配された彼を、特徴的な漆黒の瞳はにらみつける。

魔女は、何人たりとも逃さない。

数日後、ランチエスターファミリーは壊滅。雇われていた狙撃手と辻斬りも、法に則って裁かれることとなった。二人は現在懲役中で、紫苑もしばしば面会に行っていた。

昂とエミリオは、面会に来た紫苑にいつも皮肉を吐いてばかりで、なかなか反省の兆しが見られなかった。恐らく、晴れて自由の身となったら、また同じ仕事に足を突っ込むのだろう。本人たちからその言葉を聞いていたし、交わした会話から、まっとうな仕事を探す

とは感じられなかった。

友人が人の道から外れたら、衝突してでも友人を人の道へ戻すのが友人である、というのが、紫苑の信条である。紫苑はそれに従って、自分が彼らから何を言われようとも、彼らを更正するつもりだった。荒療治ではあったが、紫苑はそれを遂行した。

彼らを人の道へ連れ戻すために使った特效薬は、彼らを家族と面会させることだった。

昂は母と、エミリオは恩人であるロツクウェル兄弟と。

この効果は靦面だったらしく、その面会から更に数日経ったあと紫苑と面会しても、彼らは皮肉を言わなくなった。代わりに、さんざん軽蔑されたが、友人がまっとうな人生に戻ることができるなら安いものだった。

その面会の際、昂とエミリオは紫苑に問うた。

「な、紫苑。やっぱりお前は魔女なんじゃないか？ 人間じゃなくてさ、本物の魔女」

「そうそう。魔女はなんでもお見通してヤツ？ 僕らの牙をここまで徹底的に抜くなんてさ」

紫苑は答えた。

「わたしは、自ら魔女だと名乗ったことは、一度もないわ」

紫苑の能力を恐れた者が、思い込みで勝手に彼女をそう呼んだだけのことなのだ。昂は苦笑した。

「確かにな。でも、やっぱりお前は未恐ろしいよ」

「お褒めの言葉、恐れ入るわ。それより、早い社会復帰を祈っているわ、友人として」

「あは……そりやどうも」

面会を終えた紫苑は、外で待っていた番犬と一緒に、仕事場へと戻っていった。

解決（後書き）

ようやくと完結しました。長かったような短かったような、初の連載に戸惑いつつ、完結できてひとまずほっとしております。

ここまでおつきあい下さり、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3697p/>

魔女の悪党狩り

2010年12月31日16時10分発行